# SEVEN HILLS

The magazine for high net worth individuals

セブンヒルズ
世界を舞台に活躍する
資産家のための
マネー&カルチャー誌

5
MAY 2007 Vol.029

## もっと アートを！

特集 Buy Art!

ブルーの楽園、タヒチ
新しいエイジングケアの潮流
成功の鍵は大局の読み

スペイン・パンプローナの貴族の家系に生まれる。大学生のときに体験した水上バイクに運命的な出会いを感じ、冒険家となって世界の海を水上バイクで渡る。この冒険を通じドラッグやアルコール依存に反対するメッセージを送り続ける。フランシスコ・ザヴィエルの15代目子孫であり、昨年はザヴィエル生誕500周年を記念して香港から日本へ。「陸の上」では不動産会社経営者である

# Alvaro de Marichalar

## アルヴァーロ・デ・マルチェラーラさん

冒険家、不動産会社経営者

「牛追い祭り」で有名なスペイン・パンプローナに生まれたアルヴァーロ・デ・マルチェラーラ。貴族の出でありながら、パリとマドリッドに不動産会社を経営するビジネスマン。そして、世界中の海を小さな水上バイクで渡るという冒険家でもある。日本にも馴染み深いフランシスコ・ザヴィエルの15代目の子孫でもあるという彼の中には旅の精神が流れている。そんなアルヴァーロに人生の哲学を聞いた。

矢幡聡子／インタビュー　野地康之／写真　今井栄一／文　ビリオネア／撮影・衣装協力

「東洋へ行ってくれる勇敢な神父はいないか」。ポルトガル王ジョアン3世の命を受け、ザヴィエルはリスボンからインド、マラッカを経、1549年、鹿児島の地を踏んだ

**――アーネスト・ヘミングウェイが『日はまた昇る』を書いたスペイン・パンプローナの貴族の一家に生まれ、フランシスコ・ザヴィエルの子孫であり、不動産会社を経営するビジネスマン。一方で、小さな水上バイクで世界の海を渡る冒険家でもある。様々な顔を持つあなたの「正体」を教えてください。**

もし、ひと言で私という人間を表現するなら、「ファイター＝闘士」ということになるでしょう。私はパリとマドリッドに不動産会社を持ち忙しく働いています。一方で、20年以上海の上で無数の冒険をしてきました。私は自分の夢のためにチャレンジするファイターなのです。

私を有名にした水上バイクでの冒険は仕事ではありません。それは私にとって喜びであり、究極的な趣味と言えます。でも、ただの遊びとは違います。水上バイクでの活動を通じて、私はずっと闘ってきたわけですからね。

**――それはたとえばどんなことでしょう？**

たとえば、若者のドラッグやアルコール依存に反対するキャンペーンやメッセージ。特にドラッグへの反対運動は、私が水上バイクでのチャレンジを通じて、スペインだけではなくヨーロッパ全体に強く広くメッセージしてきたことです。私が冒険をすることで、多くの人が注目します。

私という広告塔を通じて、より多くの人にこの問題を知ってもらい、考えてもらえる。メッセージすること、より多くの人々に興味を持ってもらうことは重要です。だから私はあえて危険な冒険にチャレンジしているのです。そういう意味で私はファイター（笑）。インド洋で大津波が発生したときにはすぐにスリランカへ行きました。家を失った多数の人々のために、その寄付金を募るために海の上を駆けました。

私はまた、世界中のより多くの人たちに、海へのリスペクトを感じて欲しいと願っています。海のことを知り、海を愛するようになれば、今世界中で起きている問題のいくつかは解決できると思うのです。海の上では国境を感じません。海は広大で、強く、美しく、時に厳しく、圧倒的な存在です。海の上にいると人間の小ささを感じます。海を知ることは、人間が抱える問題が「なんてちっぽけなものなんだろう」と気づくことなのです。

**――水上バイクで広大な海を渡ってきたあなたは、いくつもの世界記録を保持しています。そもそも、ヨットやカヤックではなく、なぜ水上バイクだったのでしょう?**

1980年代、私は経済学とビジネスを学ぶ米国の大学生でした。ある夏、友人と海で水上バイクに乗ったんです。その瞬間に閃きました、「この小さな乗り物で僕は、何かとてつもない冒険をしよう。これを通じて海について学ぼう」と。最初に水上バイクに触れた日に私は、自分の将来の姿を見たんです。その姿とは、自分が水上バイクで大西洋を横断しているという絵。米国東海岸からスペインへ向かって。その日が、私の大きな冒険の始まりの日でした。

**――パリとマドリッドでの仕事について教えてください。スーツを着たあなたがそこにはいるわけですね?**

1年のうち8カ月は不動産会社の仕事に集中しています。そのほかの4カ月間、冒険のためのスポンサーと交渉したり、講演に招かれて各地を飛び回ったり、執筆活動をしています。そして、海の上に出ます。冒険、冒険、また冒険です。

パリとマドリッドにいるスーツ姿の私と、ウエットスーツで潮まみれになっている私と、実は変わらないし、2つを引き離して考えるのは難しい。というのも、不動産の仕事でクライアントに会うことも、冒険のためにスポンサーと会うことも、私にとっては同じように大切なことですから。そして実は、それぞれが密接に関係し合ってもいるんですね。

**――「人生」という場所と時間の中で、あなたは、とても良いバランスを保って生きているようですね。**

そうありたいといつも思っています。生きていく上でバランスを保つことは非常に大切です。仕事に熱中することは重要ですが、仕事にばかり追われるのは良くありません。仕事は人生のすべてではないのです。冒険も人生のすべてではありません。そう、どちらも、追われてしまったらだめなんです。仕事も遊びも、喜びを感じながら関わっていくべきです。

私にとって人生とは、とてもスピリチュアルなものです。私たちはたくさんの物に囲まれて生きていますが、人生とは物では図れないもっと崇高なもののはずです。人生とはあらゆる偶然や驚きが絡

勝利の美酒に酔う。海の上で青い色の水平線を見る―その喜びのために旅をするという

この水上バイクで香港から日本を完走したというからすごい。本人は冒険家というより「ファイター」であるという

今から450年ほど前、ザヴィエルがローマに送った書簡には日本人に対する大変な好意が記されていたという。同じ血を引き、また同じ「冒険家」であるアルヴァーロ氏も日本が大好きのよう

み合って起きる奇蹟の時間です。私はそれを信じながら生きていきたい。

水上バイクで石垣島へ行ったとき、私は島の小学校に招かれました。子どもたちは会ったこともない私に向かって言いました、「フランシスコ・ザヴィエル！」。その瞬間私たちはみんな友達になりました。私は彼らに、自分が撮ってきた旅の映像を見せてあげました。そして語りました、私の冒険のことを。子どもたちにこう語りかけました、「君たちはこれから何でもできる。未来は自分たちのものだ。何をやろうと自由なんだ。恐れちゃいけない、勇気を持ってチャレンジしなさい！」って。それからしばらくして、子どもたちからEメールが届いんたんですよ！　素晴らしいですね。これが人生の奇蹟だと私は思います。

私はこういう話を会社の部下にもします。物事をどのように考え、オーガナイズし、進めていくべきか。遊びも仕事も、根本ではまったく同じなのだと彼らに言って聞かせるんです。

**――あなたは裕福で、豊かな暮らしをしているのに、とても精神的な世界に深い興味を持っていますね？**

マテリアル・ワールド（作られた世界）には真実はあまりないと思っています。真実は常に、心や肉体の内にあるものです。誰もが大きな家に暮らしたい、素敵な車を持ちたいと願う。私だってスポーツカーは大好きですが、なるべく人工的な物事には深く関わらないように心がけています。海にいるとき私はひとりの素の人間です。そして、そういう状態にある自分が私は好きなのです。

海の上で見る水平線が常に灰色だって知っていますか？　それって人生に似ていませんか。人生は常にバラ色じゃない。多くの場合人生は灰色に霞んでいるものです。海と人生はよく似ています。私はだから、青い水平線を探します。それは実際に見える青ではありません。たとえば冒険をして日本へやって来て子どもたちと出会ったとき、彼らの笑顔を見たとき、彼らとの間に調和を感じたとき、そのとき私はそこに青い水平線を見るのです。私はその喜びのために旅をしている。人生の多くの日々は灰色かもしれません。でも、誰の人生にも必ず青く輝く水平線が現れる。それを探すことが大切なんだと思います。

**矢幡 聡子**
**やはた・さとこ**

CORE SLTD.代表取締役。聖心女子学院卒業後、スイス、フランスへ留学。欧州国連本部、小谷正一事務所を経てCORE SLTD.を設立。主な仕事は、国際文化交流事業の企画運営。PRコンサルタント、衛星テレビのプロデューサー、エッセイストとしても活躍。日本UNHCR協会理事